



26
YAMA
FUJI

雑
雑
雑

定価は、カバーとオビ
に表示してあります。

昭和五十一年五月三十一日

初版発行

検印廃止

著 者 草 野 心 平

発 行 者 村 川 修 二 郎

印 刷 松 濤 印 刷 株 式 会 社
太 陽 印 刷 工 業 株 式 会 社

製 本 有 限 会 社 教 文 社

発 行 所 番 町 書 房

東京都中央区京橋三ノ五 一〇四 主婦と生活社内
TEL(五六七)〇三二(代) 振替東京五一五八四四

© Shinpei Kusano 1976 Printed in Japan
(乱丁本・落丁本はお取替えいたします)

雜
雜
雜
雜

目
次

I

私の主治医 12

身辺雑雑 14

庭と畑の春 19

小石川植物園 21

茄子の二毛作 23

はたちのころ 26

銅駝の怪物たち 29

「銅駝の怪物たち」補遺 33

旅と花と魚と 36

鬼ごろしの島 42

蓼科雜記 46

リンリン 50

四郎九郎 53

安 55

結婚と煙突掃除屋 57

やきとりや時代 63

誕生日 77

借金の証文 84

自動車教習所通い 86

テアトル・ククラ 87

大晦日物語 88

青春無頼 99

泥棒道 113

ユーモア 118

II

白夜 122

試飲会欠席記 123

五日酔関西記 126

Symphony 129

あの時あの酒 133

五十すぎの学生飲み 136

大晦日の酒 138

十五年のロス 140

「火の車」酔眼録 141

「火の車」閉店記 144

変った酒の店 148

禁酒 152

中国の酒 153

茅台酒 156

白乾と老酒 157

白酒 158

一年を吐き出す 159

葬式の万歳 160

柏木四丁目交番
163

III

塩鯉
168

ジンギスカン料理
169

旅の食膳
174

私の酒の肴
176

素人の包丁
178

蛇料理
180

解放後の中国料理
182

羊料理いろいろ
186

魚生粥
189

中国の果物 190

生きものの食べある記 195

漬物談義 200

食・雑雑 207

食いもの交換 212

山菜連想 214

私の空想料理 217

みちのくホントの山菜 219

ボウノリと山菜ベントウ 223

市場通いの楽しさ 226

装
幀
山
藤
章
二

雜
雜
雜
雜

私の主治医

もう古稀も通り越した年である上、極く近年までは方々を転々していたので主治医もその時々変って数人にはなっていると思う。そのまんなか辺の主治医に就いての思い出を書いてみたい。

思い出というのは、故人になったからで、その人は関覚二郎博士である。

本郷で居酒屋「火の車」をやっていた頃、常連の一人であった東大の馬専門の岡部利夫博士が、或る晩、関さん同道でやってきた。それが偶然のキツカケになって関さんは高村光太郎の主治医にもなった。当時高村さんは岩手の山小屋から東京にでてきて、中野桃園町の故中西利雄のアトリエに住んでいたが、山小屋時代からの肺の病いが大部悪化していた。

岡部君は大のウワバミで、関さんも酒豪だった。岡部君は相変らず「火の車」によくやってきたが、関さんも時々私の店に現われた。そんなことから私は関さんに高村さんの容態を話した。それは店に高村さんの「天上大風」の書がかかってあり、関さんは「いい書ですなあ」と言われたことにヒントを得たのだった。そんなキツカケから私は駄々をこねる高村さんを同道して神田の出版健保の診療所に行った。関さんの診察の結果は相当悪く、それから十日に一度位は中野のアトリエに往診に行ってくれた。

或る日、関さんと相談の結果、入院した方がよいということになり、高村さんには話さずに関さんの友達が院長をしていた山王病院に手続きをとってしまった。高村さんはわれわれの策略にひっかかり、おとなしく入院したが、一ト月程で退院、けれども翌年、昭和三十一年のエープリルフールの大雪の夜中に他界した。

私も度々関さんの世話になった。診療所に行くとか関さんは診察の前にウイスキーを勧めてくれたりした。高村さんが亡くなった年の九月に私は中国から訪中日本文化使節団の一員として招待された。ところがその頃胸の具合が悪くなっていた。関さんの紹介で久里浜の病院にはいるよう勧告されたが、どうも気乗りがしなかった。

「久里浜の石原院長は、ちゃんと個室をあてがって、少し位なら御酒をのんでもいいと言ってますよ」と関さんは私を煽った。それはうれしかったけれども入院すると中国へは行けない。中国は私にとっては第二の故郷である。無銭旅行が出来るこのチャンス逃がしたら、貧乏な自分は当分はとも中国へは行けっこない。そこで私は関さんの好意に逆くことにした。

「じゃ、旅でもっと悪くしてから、入院ですなあ」と言ってお関さんは笑った。

ところが四十五日の中国の旅から帰ってきた私は、行く前よりも肥って健康になっていた。右肺には休火口がいっぱいあるが、その後噴火はしない。その代りその後武蔵境の日赤には八度か

九度入院している。胃の手術、江東病院での眼の手術など病院とのつきあいは多忙だったが、古稀を二つ過ぎてもまだ生きている。まだまだ生きたい。まだまだ仕事はいっぱいある。幸い武蔵野日赤病院の主治医の植木先生はずいぶん親切で、私の我儘を大目に見てくれる。去年の暮も武蔵野日赤に入院したが、十五日ほどの病院生活で帰ってきた。八度か九度共いつも五階の病室だが、運がよく、殊に一代目二代目の婦長さんとは、家庭づきあいまでしているほどである。最初の入院以来、今年の婦長さんは四代目である。

〔クリニック・マネジメント〕76年4月号〕

身辺雑録

その日は朝から胸のあちこちが痛かった。時々キリモミのような痛みが前後の、また横の肋骨あたりを突っ走った。そんな時約束通りNHKのプロデューサーとアナウンサーが連れだつてやってきた。新年に録画する四回分の「女性手帖」の打合せを、私はカンペンしてもらつて、ベッドに横になりながらやった。その間にも稲妻が突き刺さるような痛みがきて、私は思わずイタタタッと声に出したりした。自分は以前肋膜炎もやり、胸のレントゲン写真には、殊に右肺には休火口がちらばっている。けれどもこういう痛みの経験はなかった。恐らくは肋間神経痛みたいなものだろうと思った。